
オタクさんの転生事情

ハド爺さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタクさんの転生事情

【Nコード】

N0149Y

【作者名】

ハド爺さん

【あらすじ】

色々な人が残念な転生をします。

11 / 5 念のため残酷な描写有りとさせて頂きます。

プロローグ

子供の頃、世界は夢であふれていた。
どんな事もでき、何にでもなれると本気で信じていた。

大人になるにつれて、それが根拠の無い幻想だとわかってても認める事はできなかった。
だから、ゲームやアニメといったサブカルチャーに傾倒していったのも当然といえる。

あの中は夢で溢れている。

今ではオタクの聖地とも言える電気街に新作を漁りにくる毎日。
この街では「いい年した大人が何をしているんだ」といった差別的な目で見られる事はない。
同じ趣味の仲間が集う街。そこでは良識ある大人は逆に少数派だ。

未来の展望どころか現状の把握すら放棄し、偽造の夢にひたること
で自分を保とうとする人々にあふれている。

そんな居心地の良い街の空気に触れながら、日課の本屋巡りを終えて、ふと暗くなり始めた空を見上げると・・・そこには太陽が二つあった・・・

・・・20××年 7月×日

謎の隕石落下により1つの街が消滅し、死傷者・行方不明者合わせて1万人を超えた。

・・・

そこは見渡す限り黒い部屋だった。

不思議と明かりが無いのに天井や壁がはっきり見える。

自分の体は無いらしく、意識と周りの状況だけがわかるようだ。
体が無い事から、死んだのだろうか、何の感情もわからない。

これが、生前の性格によるものか、この空間のせいなのかは、わからない。

不思議と心が落ち着いていた。

その時、どこからか声が聞こえた。

『あなた達を転生させますので、一つだけ希望を言って下さい』

最強の転生者

『あなた達を転生させますので、一つだけ希望を言ってお下さい』

この言葉を聞いた時、今まで穏やかだった俺の心が一瞬で最高潮にまで湧き上がった。

よく、人生は誰もが主人公だと言うが、あれは嘘だ。
もし、そうだとしたら俺の人生は酷くつまらない物語だ。

一般家庭に生まれ、普通の幼少時代を過ごし、悩むことなく近場の三流大学へ、そこを卒業したら地元で就職し、定時に帰ってゲームをする日々。

三十路を過ぎたあたりから、結婚をあきらめ現実逃避に没頭する毎日。

休日は、トイレと食事以外はパソコンの前から動かない。

いつ死んでも良いが、死にたくはなく、誰かが日常を変えてくれる事を妄想して気を紛らわせる。

こんな物語、誰が喜ぶというんだ。

しかし、今は違うやつと選ばれたのだ。

俺が主人公だ。

よくある小説のように、最強の力を手に入れ世界で名を馳せてやる。気分が高揚して、いてもたってもいられなくなった俺は気付くと勢いにまかせて叫んでいた。

[illegible]

結論から言うと、俺は間違いなく世界最強だろう。

刃物も通さない硬質化した皮膚

睨むだけで人を殺せる眼力

軽く動かすだけで竜巻を起こせる翼

そう、俺は最強のドラゴンに憑依したようだ。

人間でない事に愕然としたが、まあそこは良い。

5

封印中だった。

がんばって見たが指一本動かせない。

どうも生来の破壊衝動から暴れていたドラゴンを、国を挙げて討伐しようとしたようだ。

しかし、どうしても倒すことができずに封印する事で精一杯だったらしい。

はあ、あと何年封印されてなきゃいかんのだろう
これこそ、つまらない物語だ・・・

世の理（ことわり）を知る転生者

『あなた達を転生させますので、一つだけ希望を言ってお下さい』

この言葉を聞いた時、僕は今まで以上の混乱におちいった。

僕は、そこそこの頭の良いほうだと思う。

なぜなら、僕が世界にとって無価値で無意味な存在だと判っているからだ。

人間は人生に意味を持たせたがる。

自分の存在は特別だと盲信して、価値を求めて生きている。

この世界から見たら、どんな生物にも価値なんてないのに。

自分を無価値だと認めながら、心を殺して生きていくしかないんだから。

だからこそ、この提案には驚いた。

転生させてもらえるのは良い。

輪廻とか、そういうシステムで世界はできているのだろうし。

でも、なぜ希望を聞くんだろう。

何も言わずルーチンワークのように転生させれば良いじゃないか。

「君は特別です」とでも言っただろうか。

そもそも、この声の主は何者だ。神様なのか。

残念な転生者

『あなた達を転生させますので、一つだけ希望を言ってお下さい』

この言葉を聞いた時、自分は不覚にも軽く失禁してしまいました。こっ、これはテンプレートな転生フラグではありませんか。

物心ついた時から漫画やアニメにドップリ浸かり、クラスメートの名前は覚えて無くても、好きな漫画の登場人物はモブキャラですらフルネームで言える自分としては、垂涎ものの展開であります。

まあ、垂らしたのは涎ではありませんでしたが、それは些細な事、^{びくくる}冷静にであります。

このような展開に慣れている自分としては、現在の状況確認が急務であります。

まず、この死亡が誰のせいかで今後の対応を決めねばなりません。

よくある「神様のミス」で死んだ場合は、強気にいき情報を引き出し、転生時の特典を増やしてもらうのが定石なのです。

しかし、先ほどの声は『あなた達』と言っておりました。

さすがに、ミスで複数の人間を殺害というのは、自分の知識を持つとしても記憶に無いパターン。

となると、「神様の娯楽」のために転生させられるという状況が有力ですが、この場合は他の転生者の有無で対応を変えねばなりません。

今回は、他の転生者がいるので、良くある『最強の力』や『無限の魔力』という願いは神様も辟易しているはずですから避けます。ベストな願いは神様に『そんな力で良いの?』と言わせつつ、使い勝手の良いものです。

それを決めるのには、転生先の情報が重要になってきます。まずは、神との交渉と洒落こみましようか。

・・・あのー・・・

あれ、声がでません。

ああ、体が無いので当然ですか。

それなら、どうやって願いを伝えるのでしょうか。
例えばテンプレ通りに心を読んで・・・

・・・って、心読まれてんじゃね

心の声、駄々漏れじゃね。

都合よく願いだけ聞こえますってわけなし、今まで考えてた事、意味無いじゃん。

うわぁー、初歩的なミスかましたわぁ。ないわぁ。

はぁ、もうどうでもよくなりました。

情報を教えてくれつつ頼みが、頼んだと判断されても困るので、さっさと願いを決めてしましましょう。

昔の漫画の主人公で、板であれば、どんな板でも作り出す事ができる能力

【無限の板製（UNLIMITED PLATE WORKS）】
これを使えるようにしてもらいましょうか。

転生物で、もつとも良く使われる能力だが、それだけに使い方が検討されつくしていますし。

木の板で家を作ったり、金の板を売って金にしたり、オリハルコンやミスリルといった空想素材で強力な武器を作ったりと汎用性もあります。

もちろん板を作る能力なので、目の前に壁を作って防御もできるし、薄くした板を飛ばして相手を切り裂いたりもでき戦闘にも便利。

まあ、他の転生者と同じ願いをするでしょうが、培った知識で自分の方がうまく能力を使えるはずですし。

・・・ふう

当初の予定とは、大分離れてしまいましたが、この能力なら転生先で苦労する事は無いでしょう。

あとは、転生者という事を隠して、面白おかしく生きてみましょうかねえ。

では、

「無限の板製（UNLIMITED PLATE WORKS）を使えるようにして下さい」

気がつくと、赤ん坊になっておりました。

目はまだ見えませんが、父親や母親であろう声が聞こえるので転生成功といった所でしよう。

転生先を指定できなかったので、いきなり天涯孤独とか森に捨てられるとか、

ヘルモードバージョンも想像していましたが、そこは考えすぎだったようです。

もちろん、いきなり能力を使って両親を驚かせるような事はしませ
ん。

自分で動き回れるようになるまで辛抱我慢であります。

今は早く言葉を覚えるようにしますかねえ。

残念な転生者たち

俺が神に

「無限の板製（UNLIMITED PLATE WORKS）を
使えるようにして下さい」

と願ってから5年がたった。

俺は早々に言葉を覚え、知識を集めまくった。

まあ、5歳児が出来る事など高が知れているが、それでも大体の事は理解できた。

まず、この世界は一般的な転生物のように、剣と魔法の世界のようだ。

大体10〜20世帯で集落を作り、農業や狩りをして生活する中世ヨーロッパのような文明レベルだ。

集落の外には、危険な動物も多くいるようだが、街道から外れないかぎりには、そう襲われる事もなく平和な世界らしい。

国も相互補助の関係が強く、危険な動物から身を守るための組織といった役割に過ぎず、そういう理由から集落同士の小競り合いはあっても、国家間の戦争といったものは、あまり無いようだ。

食文化も進んでいて、マヨネーズやケチャップといった物まであった。

最初は、危険な世界でないかと心配していたが、それは杞憂だった。世界は平和で、とても過ごしやすかった。

だからこそ理解した。

俺が考えていたより、神は残酷だったと・・・

この世界に義務教育といったものは無く、俺くらいの年で家の手伝いを始めるのが普通だ。

家は鍛冶屋をしており、俺はその跡取り息子として仕事を手伝っている。

そのため、鍛冶屋にある道具はいつでも使える。

そう、『UNLIMITED PLATE WORKS』という名の鍛冶屋を使えるのだ。

この現実を理解した時、俺は愕然とした。

最初、あまりに色々と考えてたから神に嫌われたのかと思ったが、それは違っていた。

なぜなら、町には「殿の財宝」や「バンジージャム」といった漫画の必殺技や能力の名前をした店が多くあったからだ。

『UNLIMITED PLATE WORKS』という名前の店にいたっては、武器屋だったり酒場だったりと5件以上ある始末。

また、「シロウ」や「クロロ」と言った漫画のキャラと同じ名前の奴が、ゴロゴロしている。

たぶん、「。。。になりたい」といった願いをしたのだろう。

極めつけは、今俺が住んでいる集落は200世帯程の大きな街なのだが、名を『ネジマ』という。

『ネジマ』とは、前世で流行っていた漫画の題名だ。

5年前まではポルラという名前の街だったらしいので、誰かが

「ネジマの世界に転生したい」

と頼んだのだろう。

どうやら、神は俺達にまったく興味が無いようだ。なんといつても願いの叶え方が雑すぎる。

もし、神の娯楽のために転生させたのなら、この世界に影響を与える能力でなければ意味が無いはずだ。

俺のように、普通の鍛冶屋の息子として生まれても、世界は何も変わらないだろう。

もちろん、能力が使えないというだけで諦めたわけではない。

子供の頃から、剣や魔法の練習をすれば、かなり強くなれるのではと考え、剣の練習をした事もある。

まあ、普通に努力できるなら、前世でも苦労はしてないという事だ。子供の頃からやろうと、大人になってからやろうと、要は心の問題だ。

強くなりたいというような明確な意志が無いと、途中でどうしても

甘えがはいる。

なまじ、この世界が平和なため、何事にもやる気がでないのだ。だって、斬られたら痛いんだよ。ちよつと練習用の剣で、指を切ったが脂汗がでるくらい痛かった。

こんな痛いおもいをしなくても、俺は鍛冶屋を継げば食べていける。剣の練習は1ヶ月くらいで止めてしまった。

魔法は、使えないわけでは無いが、才能が無いため日常的に使うだけで精一杯だ。

他にも俺が転生者である事は、街中に宣伝しているような状態のため、転生者同士で協力しようという提案を受けたこともある。

だが、名前がアニメキャラなだけの一般人が何人集まった所で、なにもできない事がわかった。

小説では定番の、元の世界の知識を活用しようにも、パソコンの使い方や車の運転の仕方くらいしか身についている知識はなく、農業などに至っては機械に頼った考えしかないため、むしろマイナススタートだ。

料理改革をしようにも、普通に食事はうまいし、作り方を知っている唯一の調味料『マヨネーズ』は既にある。

さすがに醤油は無かったが、それも作る事はできなかった。

酷い話だが、作り方が判らなかつたのではない。

一人変わった転生者が醤油の作り方を知りたいと願っていたため、醤油の作り方は判っていたのだ。

ただ、醤油を作るために必要な麹菌の作り方までは、知識を与えられていなかった。

神はどこまでも、俺達を馬鹿にしているらしい。

今では、当初の目的であつた輝かしい人生計画は根底からポッキリと折られ、そのあまりの気恥ずかしさから、転生者同士であっても最低限の付き合いしかしていない。

・・・それでも俺達は、まだマシだった・・・

俺が生まれてしばらくして、世界ではある奇病が問題になった。

生まれた子供が、まったく成長しないのだ。

中には、どんな事をされても死なない子供までいた。

神に「不老不死」を願ったのだろう。

かなりの転生者が、この願いを言ったらしく患者の数は、五百人と
も千人とも言われている。

俺達の街でも、3人いたらしい。

俺が言葉を覚えて、この事を知った頃には、既に王都の収容施設につれて行かれた後だった。

原因不明の奇病のため赤ん坊を、その家族ごと隔離しているという噂だ。

何をされてもけして死ねない彼らは、検査と称した実験を永遠に受ける事だろう。

神は何のために俺達を転生させたのだろうか・・・
今ならそれを願うというのに・・・

裕福な転生者

『あなた達を転生させますので、一つだけ希望を言ってお下さい』

この声を聞いて、私は少し落ち着く事ができた。

この真つ黒な部屋には、私以外は誰もいないようで、さつきから、色々と呼びかけていたが、何の反応もなかったのだ。

それが、やっと声が聞こえてきたのだから、その事に安心したとしても、仕方無いと思う。

・・・あのーここはどこですか・・・

今までとは、違い声のした方へ問いかけてみる。

・・・私は死んでしまったのでしょうか・・・

・・・一緒にいたはずの紗代ちゃんは、どうしたんでしょう・・・

・・・あのー・・・

まったく反応がない。

あまりの寂しさに、幻聴を聞いてしまったのだろうか。

実際、私が死んでるって事は判っているんだ。

だって、紗代ちゃんに連れられていった電気街で、爆発に巻き込まれた記憶がはつきりあるのだから。

熱くて、息苦しくて、一秒でも早く楽になりたかった強烈な記憶。

あの状態では、助かるわけがない。
現に、今の私には体が無いじゃない。

死を自覚したとたん、急に悲しさがこみ上げてきた。

・・・死んじやったのかぁ・・・

・・・お父さんとお母さん泣いてるかなぁ・・・

・・・マー君に電気鼠を描いてあげる約束してたのになぁ・・・

もう会えないであろう家族の顔を思い出し、泣きそうになるが涙が
でる事はなかった。

・・・体、無いもんね・・・

いつか見たテレビで、泣く事は最大のストレス解消法と言っていた
が、その通りだ。

泣けない事が、こんなにつらいと思わなかった。

悲しくて悲しくて、今まで楽しかった事や辛かった事が走馬灯のよ
うに頭に浮かんでくる。

お父さんは優しくかったけど、不器用だったから出世できずにヘトヘ
トになるまで働いてくれた。

お母さんは、いつも笑顔で美味しいご飯を作ってくれたけど、金銭
感覚が無かったな。

よく、アパートなのに高枝切りバサミを買ったり、純金の印鑑買っ
たりしてたな。

冷静に考えると家は、かなり貧乏だったと思う。
私も新聞配達などで、生活費を入れていたほどに。

だって、お母さんが使ったもん。

20万の高級羽毛布団って何よ。しかも家族4人分。

「だって、今年の冬は寒いつていうからあ。」
って毎年、寒いよ。

お父さんは、いつも苦笑いで許しちゃうし、マー君も幼稚園児だから止めやしない。
一時期、家に帰るたびに物が増えているので、抗議の家出をした事もあったなあ。

マー君もマー君だ、誕生日プレゼントの電気鼠の絵だって

「お姉ちゃんの絵が良いな。既製品は味気なくて駄目だからね。」
凄い気の使いようだよ。

君は幼稚園児なんだよ。もっと我慢いつていいんだよ。

・・・その絵すら渡せなくなっただけさあ・・・

なんか、お母さんの愚痴を言ったら落ち着いちゃったな。
まあ、貧しくも楽しい我が家だった。

「ただ今度は、お金に困らない生活がしたいかな。」

「それに、お嬢様は聡明でいらっしゃる。どんなパーティーに出ても恥ずかしくありませんよ。」

そう言つてにつこり笑うと、ゆっくりと私を促してくれた。

（本当に満たされてるなあ・・・）

そうこうしてる内に、目の前に大きな扉が見えてくる。

係りの人が私達を見て、笑顔で扉を開けてくれた。

（だけど・・・）

穏やかな談笑に包まれる広い会場に、一際大きな声が響いた。

「シルビア姫。御到着されました。」

（王族は、やりすぎだよお）

放浪の転生者

『あなた達を転生させますので、一つだけ希望を言ってお下さい』

この声に、僕は年甲斐も無くワクワクしたんだ。

昔の歌では無いが、ちょうど地球の男に飽きた所だったから。

こういうと、かなりの悪女っぽいけど、僕が男性と付き合った回数
は片手で足りる。

というかピースサインで・・・やめとこう・・・空しくなる。

だからと言って、さっきの言葉は強がりってわけじゃない。

本当に男と言うより、恋愛に嫌気がさしてしまったのだ。

僕の職業は、街専門のカメラマンだ。

人物も撮るけど昔から、色々な街並みの方が好きだった。

子供の頃、僕のお気に入りの公園が取り壊されアパートになるって
いうので、その景色を忘れないよう、下手な絵を必死に描いたのは
良い思い出だ。

そんな事もあって、景色を残しておくのにカメラを使い始めるまで、
時間はかからなかった。

趣味が高じてカメラマンになってからも、暇を見つけては写真を撮
りに街に繰り出していた。

髪型もボブとショートを往ったり来たり、肌も最低限の手入れはし

てたけど、日に焼けて真っ黒、自分で言うのも何だけど、遠くからなら完璧に男の子に見えたと思う。

そんな僕だけど、不思議とモテたんだよね。

不本意ながら、明るくてノリが良いから軽い女だと思われたみたいなんだ。

高校時代に初めて付き合った先輩は、友達に僕のどこが好きか聞かれて、こう答えていた。

「簡単にやらせてくれそうだったから。」

もちろん翌日、平手打ちをお見舞いしてからお別れしたけど。

それから、どうも男性の下心というものに敏感になってしまったんだ。

その癖、この容姿のために体育会系で馬鹿で軽いと思われているらしく、世の男どもはバンバンセクハラしてきやがった。

どちらかと言えば僕は文系だ。

アクティブなのは、写真を撮る時だけなのに。

一時期、本気で髪を伸ばして服装を変えたり、法律を勉強してみた。りした。

前者は仕事の邪魔で、後者は僕の頭では理解できず、すぐあきらめてしまった。

そんな男性不振の塊だった頃、彼と知り会ったんだ。

彼は、図書館の司書をしていて、調べ物のため本を借りにいった時、

貸し出し係をしていたんだ。

彼ったら、僕が本を借りに来てるのに気付かず、ずっと自分の本を読んでいるんだよ。

仕事かかと、しばらく待つてたら、常連のおばちゃんが

「女の子を待たせちゃ駄目よ。」

って怒ってくれた。

初めてこっちに気付いた彼は、しどろもどろになりながら対応し始めたんだ。

普通なら怒るんだろうけど、僕はその時カワイイと思っちゃったんだよね。

それから、本を返却する時に話したり、資料を探すのを手伝ってもらったりしたら、どちらからという事も無く付き合う事になった。

僕はその時、彼氏ができたのが嬉しくておかしくなっていたんだと思う。

いつも以上に仕事が楽しくなって、1ヶ月くらい地方に行く事も良くなった。

帰ってくれば彼が待つてくれると思うと、どんな事もがんばれた。たまに彼がくれるメールが心の支えだった。

でも、付き合って1年くらいたったある日、突然彼から別れを切り出されたんだ。

「君に僕は必要ないだろ」
それは残酷な言葉だった。

突然の出来事に頭が真っ白になり、その後襲ってきたのは、感情の濁流だった。

（なんで何を言ってるの）

（必要に決まってるよ）

（なんで決め付けるの）

（僕がどれだけ嬉しかったか知らないくせに）

（そんな哀しい目で見ないでよ）

そう思っても、喉からはヒューヒュー空気が漏れるだけで声が出せなかった。

結局、彼が帰ってしまった後も僕は固まったままだったんだ。

今になって思うと、彼は寂しかったんだと思う。

優しくて自分の事より、僕を優先させてくれていたけど、彼だって僕に会いたかっただろうし、必要としてたんだろう。

それなのに、僕は自分勝手に飛び回っていた。

完全に自業自得なんだ。

失恋のショックを忘れさせてくれたのは、仕事だった。

別れる原因が、別れた後の支えになるなんて皮肉な話だけど、やっぱり街が好きなんだと実感した。

あれから、色々な男性に声をかけられたけど、やっぱり彼が忘れられなくて、どうしても先に進むことができないでいる。

だから、もう諦めたんだ。

趣味に生きると決めたんだ、変わっていく風景、街、人々、全部撮ってやるんだって。

そう決めたのに、あっさり死んじやうとはなあ。

まあ、次の人生も

「いろんな所を見てまわりたいなあ」

そして、今度はちゃんと恋愛して見せるよ友哉……ともや

[illegible]

僕は、ガダム一家という旅芸人の一座の中で生まれた。

お父さんは曲芸師で、お母さんは一座の裏方をやっていた。そんな二人の愛の結晶が僕さ。

この世界での僕の名前はリーチエ。実は苗字が無いんだよ。
ここにいる人達は皆、座長のボルジア^{II}ガダムが育てた孤児達なんだ。

座長は孤児院をやっていたんだけど、手狭になったのと、だんだん食べていけなくなってきたので、一念発起して皆で旅芸人になったって。

「なぜ旅芸人？」って思ったけど、成功してるから先見の明があつたんだね。

座長は、かなりでっぷりしたお腹の持ち主だけど、今でもバク転が

できるっていうくらい努力家なんだ。

子供は僕しかいなかったけど、一座の皆が遊び相手に退屈はしなかった。

色々な地域で芸を見せて、お金を稼ぎ生活をする。

神様はちゃんと僕の希望を聞いてくれたんだ。

それに僕だって、ちゃんと稼いでいるんだよ。

サルの着ぐるみで、玉乗りしてるお父さんに、トランポリンから飛びつくんだ。

そして、お父さんをよじ登って肩車してもらう。

最初、練習中のお父さんに遊びで飛びついていたら、それを見た座長から出演するように言われたんだ。

今では『おサルのリーチエちゃん』と言われるくらい人気者なんだよ。

前世は男っぽくて今はサル・・・退化してるけど・・・

また、恋愛できそうにないスタートだよなあ。

でも、他の面では恵まれているし、世界は驚く事に溢れてて刺激的だ。

まず驚いたのは、ここは地球じゃなかったんだ。

だって、見た事もない獣がいるし魔法だってある。

そして、他にも転生した人がいるって事にも驚いた。

公演や補給で大体一所に一ヶ月くらいいるから、その子達とは、す

ぐ仲良くなれた。

「もとの家族の所へ生まれ変わりたい」と願った『サーリヤ』モトちゃん。

「女の裸に囲まれて生活したい」と願った風呂屋の一人娘『ユリー』フロちゃん。

前世との性別の違いから、まだトイレとか慣れないらしい。ザマーミロだ。

「無敵になりたい」と願った『シモン』カント君は、不思議と憎めない魅力的な男の子だ。

様々な町や村を巡って色々なことを知った。

そして「不老不死」の実態を知ったんだ。

初めて、その話を聞いた時は驚いたと同時に怖くなった。

だって僕の願いも、変な風に解釈されていたかも知れないんだ。

その子達に起きた不幸は人事では無く、僕にも有り得た事だった。

例えば「変わりゆく街並みをずっと見ていたい」とか願っていたら、同じ事になっていたかもしれない。

サーリヤちゃんの村でも、1人だけ「不老不死」を願った子がいたらしい。

その子は国に連れて行かれ、家族は村から追い出されたようだ。

サーリヤちゃんも必死に止めたが、5歳児では何もできなかったと泣いていた。

シモン君もあのユリーちゃんですら、この事には顔を嫌悪に歪めていた。

だから僕達は誓ったんだ。

「不老不死」を直すために全力を尽くすと、これが神様のせいだと言う事知ってるのは、僕達しかないんだから。

サーリヤちゃんは、村から追い出された「不老不死」の家族を見つけ迫害から守るために戦うといていた。

ユリーちゃんは、性転換の魔法を探すついでに「不老不死」を解く魔法を探してやると照れながら言っていた。

シモン君は国に捕らえられた「不老不死者」を保護するため、偉くなるんだと惹きこまれるような笑顔で言っていた。

僕は世界をまわって少しでも情報を集め、転生者の皆に呼びかけよう。

同郷の仲間を救うために。

恋愛は、また後まわしかなあ。

[illegible]

お母さんも笑っている。

僕の胸で寝ていた妹が、モゾモゾと動き出す。

「シュリ。起きた？」

「どうしたの？まだ眠い？」

終いには、僕の胸を両手で叩き出してしまった。

「シュリ？」

日常の出来事なのに、どこかチープだ。

ドンド

胸を叩く音が、強くなっていく。

赤ん坊の力では痛みは感じないが、酷く耳障りだ。

「シュリ、止めてほしいんだけど。」

ダンダン

「シュリ。やめて。」

叩かれているせいか、周りの景色が揺れて見える。

両親も既にいなくなり、世界が暗転していく。

ダンダンダンダン

．．グ．．ない．．

ジ．．グ．．なさい．．

．．．．ジング！

急に名を呼ばれ、真っ暗な地平線から光が指し込んでくる。

「ジング！起きなさい！ご飯です！」

激しく扉を叩く音と、ムントさんの声で頭は完全に覚醒した。

「すみません！今行きます！」

慌てて返事をして飛び起き、寝巻きを脱ぎ始める。

「ふう。早く降りてくるんですよ。」

そういうとムントさんは、食堂に降りて行った。

手早く服を着て、鏡の前で身だしなみを整える。

ふと、頬に乾いた涙の後を見つけ、ゴシゴシと袖を押し付けた。

「久しぶりに見たな、あの夢。」

両親が死んで、ムントさんに拾われた時は、毎日のように見た夢。

いまでは、両親の顔はぼんやりとしか思い出す事ができない。

思い出すのは、どこかで生きている妹の顔ばかりだ。

しばらく、物思いにふけっていたが、お腹がクルクルと鳴る音でハッとする。

「やばっ、早く降りていかなきゃ。」

短く切りそろえた薄茶色の髪から、ピョコッと飛び出した寝癖を撫で付けながら、勢い良く扉を開けると、一階の食堂に向かってかけ出した。

「ジング。私の蔵書を読むのはいいいですが、朝はきちんと起きなさい。」

食堂につくなり始まるムントさんの小言に、自業自得と反省しながら、うな垂れて席に着く。

「はい、ごめんなさい。」

「まったく。集中するのは良い事ですが、あなたは限度というものを知りなさい。この前だって朝まで起きていたでしょう。仕事はやっていたので、何も言いませんが、人に迷惑をかけてまで勉強するのは間違っています。」

「本当にすみません。」

やっぱりバレていたかと思っただ、顔にださずに神妙な顔を保つ。どうも、集中すると時間が立つのを忘れるようで、朝日や鳥の声で気付くのもざらだった。

「はあ、何度いっても。まあ良いです。ご飯を食べましょうか。」

「はい、ムントさんいただきます。」

「はいどうぞ。」

今日の朝食は、コブシ程の固いパン二つと、カリカリに焼いたベーコンとスクランブルエッグ、スープは干し肉を煮出した物にジャガイモが入っている。

ムントさんの料理は、かなり美味しい。

母さんには悪いが、幼い記憶を掘り起こしても、これ以上の料理というのは、食べた記憶がない。

ムントさんは若い時に軍隊を辞め、それからずっと森の中で一人暮らしをしているという。

一度何歳か聞いた事があるけど、年を数えていないので、よく判らないと言われてしまった。

個人的に後ろに括った髪が真っ白になっている事から、七十歳くらいだとは予想している。

仮に三十歳の時に軍隊を辞めたとしても、四十年間は一人で料理を作ってきたのだ、凝り性だったこともあってレパートリーは少ないが、一品一品の完成度は凄い事になっている。

今日のベーコンもサクツと噛み切れるが、けしてパサパサしているわけではなく、肉汁がじんわりと出てくる。

スクランブルエッグだって、しっとりフワフワでバターの風味が心

地よい。それをベーコンに乗せて口に入れた時の快感はふるえがくるほどだ。

パンも昨日の残りだから、固くはあるが塩気の聞いたスープをよく吸って、香ばしいかおりを運んでくる。

だから、どんなに遅くまで起きていても、朝食をのがす事などできない。

それほど、ムントさんの料理はおいしいのだ。

朝食を食べ終わると、それぞれの仕事にとりかかる。
ムントさんは昨日狩ってきたズンという獣を解体し、ベーコンを作るそうだ。

ズンとは、この森で良くいる大人の腰程ある四つ足の草食動物だ。
縦と横の長さがほぼ一緒という丸つとした体をしている。

大きな集落では、家畜として育てている所もあり、この国ではもっともポピュラーなお肉だ。

しかし背中皮は爬虫類のようにデコボコしていて非常に固く、野生ズンは外敵

には凄腕で転がってくるため、実は危険なのだ。

実際、旅人が気軽に野生のズンを狩ろうとして命を落とすので、問題視されている。

ただ、野生のズンは家畜より肉の質が良いらしく、ベーコンは近くの町で高く売れる。
うちの収入源の一つとなっている。

俺は、家畜の世話をした後、野草を採りに行く予定だ。

ムントさんの家には、乳を出すドンと卵を産むチャチという家畜がいる。

ドンもポピュラーな食肉用動物だが、どちらかというと乳を採るために飼われている事が多い。

ドンの乳は母乳の変わりにもなるほど、栄養価が高いのだ。

名前がズンと似ているが、まったく別の生物で、昔の人がまるっとして重そうだから「ズン」、それより大きいから「ドン」と安易に決めたのが、そのまま残っているらしい。

チャチは、とても生命力の強い鳥で、その性質から家畜としての重宝されている。

チャチは安全な場所に一回巣を作ると、ほぼその場所を変える事はない。

そのためチャチは、朝に家畜小屋から飛び出して行き、夜帰ってきて巣で眠りながら卵を温めるのである。

また、卵も一日一個のペースで生んでくれるし、日中はいないため採り放題の状況だ。

気を付けなければいけないのは、あまり頻繁に卵を採っていると危険な場所と認識されてしまうので、適度に孵化させてあげなければならぬという事だ。

先日も一匹孵化したが、生命力が強い鳥のため、親も少量しか餌を持っていない。

それでも、育っていくのだが早く巣立ちをしてもらわないと、次の卵が生まれないうえ、こちらでも餌をやって成長を早めているのだ。

餌や水をやったり、小屋の掃除が終わると森へ野草を採りに行く。森では、ズンをはじめとした危険な動物が、数多くいるが基本縄張りから外へは出てこないため、木などに付いた縄張りの目印さえ気をつければ割と安全だ。

この森にはいないが、世界にはデヴルデアといつんでもない生物が存在している。奴らは、縄張りに入った物は、何であろうと殺害する。

その強さは、一匹で街を全滅させる事ができるほど強大で、群れならば国が滅ぶと言われている。

滅多な事では縄張りから出てこないの、見かける事はほぼない。

（見かけた瞬間に殺されてしまうだろうが・・・）

それでも、この生物がいるため、森の開拓が進められず、街も飛び飛びにしか作る事ができないという事態になっている。

そういった事に気をつけながら、傷に効く薬草や料理に使う香草を摘んでいく。

森に入る人は少ないため、こういった栽培できない野草の需要は高い。

どれが危険で、どれが役に立つ野草かは、ここで生きていくために最初に習った事だった。

この知識は、いずれ旅する時も良い収入源になってくれるはずだ。

そう、知識と力を身につけたら、世界を旅するのが今の生きる目的だ。

どこかにいる妹を探すために・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0149y/>

オタクさんの転生事情

2011年11月9日13時09分発行